

# コミュニケーションの場を活性化させるスキルの解明 —「役回り」と「レトリック」による熟達度の定量的分析— Embodied Skill to Activate Communication in TV Shows

坂井田 瑠衣\*<sup>1</sup>  
Rui Sakaida

諏訪 正樹\*<sup>2</sup>  
Masaki Suwa

\*<sup>1</sup> 慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科  
Graduate School of Media and Governance, Keio University

\*<sup>2</sup> 慶應義塾大学環境情報学部  
Faculty of Environment and Information Studies, Keio University

How can we activate communication? Although we participate in and contribute to various conversations everyday, we are not necessarily self-aware of what skills we employ to activate conversations. A good example of experts good at activating conversations is comedians. They quickly grasp what roles they are supposed to play in any changing circumstances in a TV variety show so that the whole atmosphere is enjoyable. Focusing on “Ametalk”, a popular TV variety show, we analyzed conversations statistically from the viewpoints of “roles” and “rhetoric”, clarifying why the conversations make us amused.

## 1. はじめに

コミュニケーションの場を活性化させるスキルとは何であろうか。「あの人がいると会話の場が盛り上がる」、「あの人は話を展開するのが上手い」などと各人のスキルを曖昧に評価できても、その詳細なメカニズムを可視化することは難しい。

そこで筆者らは、コミュニケーションスキルの熟達度を定量的に分析する手法を考案した。本研究では、発話者のコミュニケーションスキルが如実に表れる指標として、会話の参加者が会話にて振る舞う「役回り」、および発話者が使い分ける言葉の“わざ”である「レトリック」に着眼する。コミュニケーションスキルの熟達者は、場の状況に合わせて多様な役回りやレトリックを臨機応変に使い分けられていると考えられる。本稿では、スキル熟達者としてお笑いタレントを採り上げ、タレントらがいかに状況を鑑みて会話することに長けているか、会話分析により明らかにする。

## 2. 役回りとレトリック

コミュニケーションの参加者は全員が何らかの「役回り」を担っている。役回りとは、会議における司会進行役のように、明示的に決定づけられているものだけではない。会話の目的や参加者同士の関係性に依拠して、振る舞うべき役回りは変化する。積極的に発言するだけでなく、聞き手としての役割も重要である。コミュニケーションの熟達者は、場の状況に応じて臨機応変に役回りを振る舞い分けられていると考えられる。

またコミュニケーションの熟達者による発話内容には、レトリック(修辞技法)と呼ばれる多様な言葉の“わざ”が含まれている。一般には、直喩や隠喩などの比喩表現、列叙法、誇張法などの技法が挙げられる[佐藤 92]。しかし、コミュニケーションの熟達者は、従来の修辞学的に分類されるレトリックにとどまらない多様な“わざ”を用いて発話内容を構成している。本研究では、筆者らが直感的に「優れた」表現であると判断した台詞を会話から抽出し、それらをコミュニケーションの熟達者により繰り出されるレトリックとして、従来の修辞学的な技法に加えて定義する。

## 3. 分析対象

コミュニケーションスキルを分析する対象として、お笑い番組における会話を採り上げる。お笑いタレントらは、他者の発言を

好機に、臨機応変に役回りを振る舞い分けたり、豊富なレトリックを駆使してユーモア溢れる台詞を発話したりしている。お笑い番組には、会話の熟達を志す際に学ぶべき相互行為が多く潜んでおり、研究対象としての意義は大きい。

本研究では、テレビ番組「アメトーク！」を主として分析する。本番組はフリートーク形式であり、詳細な会話の展開は出演者に任されているため、極めて創発的な会話が多く観察される。臨機応変な発話行為に長けたタレントらが勢揃いするため、出演者らの強い気概が感じられる。

コミュニケーションの熟達者らは、他者との関係性に依拠して、臨機応変に役回りを振る舞い分けることにも長けている。なかでもアメトーク！にしばしば出演するケンドーコバヤシ氏は、自らの個性を活かしつつ、場の状況を鑑みて振る舞い分ける能力が卓越している。そこで、同氏が出演する「SHIBUYA DEEP A<sup>2</sup>」も分析対象とし、同氏のスキルを番組間で比較する。

## 4. 分析方法

本研究では、会話分析によるコミュニケーションスキルの可視化を試みる。コミュニケーションスキルとは、他者とのやり取りの中で言葉や動作を相手の出方に合わせてデザインし、相互行為を理解可能な形で遂行する能力である[申田 06]。会話分析により相互行為の秩序を記述すれば、参加者がいかに相手に合わせて振る舞いをデザインするのに長けているかが判明する。本研究の会話分析手法は、コーディングによる定量的分析とともに、コーディングでは判明しない特徴の記述による定性的分析を行うという点で、言語社会心理学的アプローチ[宇佐美 99]に近い。筆者らは、役回り、レトリックの分類とそれらのコーディング方法を考案した。各々について、以下に詳細に説明する。

### 4.1 役回りのコーディング

#### (1) コーディング方法

表 1 は筆者が考案した熟達者が振る舞う役回りカテゴリである。カテゴリは (i)新しい視点を提供する役回り、(ii)前出の発話に回答する役回り、(iii)笑いを引き起こす役回りに分けられる。表 2 は「アメトーク！ 餃子の王将芸人」(2008年7月24日放送)の資料映像から作成し、表 1 に基づき発話を分析したスクリプトの例である。スクリプトの作成手法は一般的な会話分析とは異なり、横軸は出演者、縦軸は経過時間を示した表を作成し、話者のカラムに発話内容を記述するという独自の手法である<sup>3</sup>。

連絡先: 坂井田瑠衣, 慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科, 〒252-8520 藤沢市遠藤 5322, lui@sfc.keio.ac.jp

表 1: 役回りカテゴリ

(i) 新しい視点を提供する役回り
(A) 進行する, (B) 挨拶する, (C) 問題提起をする, (D) 新出の情報や着眼点を提示する
(ii) 前出の発話に回答する役回り
(E) 意見を述べる, (F) 補足する, (G) 繰り返す, (H) 相槌を打つ
(iii) 笑いを引き起こす役回り
(I) ボケる, (J) イジる, (K) 悪ノリする, (L) ツッコむ(指摘), (M) ツッコむ(念押し)

表 2: 役回りカテゴリにコーディングしたスクリプトの例

出演者名 経過時間	宮迫	蛭原	ケンコバ
0:00:00		(1) 僕とほぼ同級生ですよ(D)	
0:00:01	(1) あそうか(H)		
0:00:02		(2) 僕 40 歳なんでね(F)	
0:00:04			(1) そう思うたら蛭原さん, かつこ良く見えてきますね, やっぱ。王将と近いいうだけで(I)
0:00:07	(2) ほんまや(K)		

表 3: レトリック項目<sup>4</sup>

(a) 一旦否定してから肯定する, (b) 詳細を明かさず先の展開を想起させる, (c) 分かっているのにあえて聞く, (d) 不適切な敬語, (e) 並外れた着眼点, (f) 過剰な感情表現, (g) 格言の引用, (h) 再現する, (i) 舞台裏を明かす
--

(2) 役回りカテゴリのコーディングの信頼性検定

役回りカテゴリのコーディングの判定基準に信頼性があるか検討するため, 複数のコーダーによる判定の一致率を算出する。「SHIBUYA DEEP A」(2011 年 10 月 21 日放送)の番組冒頭約 10 分間(総発話数  $n = 345$ )について, 2 名のコーダーによりコーディングを行い, 2 名の判定の一致率を算出した。そこで本研究では, 見かけ上の一致率  $Pr(a)$  に, 偶然一致率  $Pr(e)$  を考慮した修正を加えたカッパ係数[宇佐美 99][Bakeman 97]を算出する。カッパ係数  $\kappa$  は, 見かけ上の一致率  $Pr(a)$  から偶然一致率  $Pr(e)$  を引いた値を, 全体の一致率から偶然一致率  $Pr(e)$  を引いた値で除した値である。つまり,

$$\kappa = \frac{Pr(a) - Pr(e)}{1 - Pr(e)} = \frac{0.73 - 0.15}{1 - 0.15} = 0.68$$

となり, かなりの一致<sup>5</sup>が確認された。

4.2 レトリックのコーディング

表 3 は, 筆者が新たに定義した修辞技法の一覧である。技法の名称を見る限り特段新しい技法ではないと思われるものもあるが, その技法を使用する目的がコミュニケーションの熟達者に特有であるものは, 新たな種類として列挙した。

5. 分析と考察

5.1 レトリック得点の算出

会話の熟達者が使用するレトリックに着眼し, その使用状況を定量的に計測する指標を考案した。レトリックの出現頻度および出現のバラエティを分析し, 「レトリック得点」を算出することで, 該当会話において各参加者がどれだけ言葉の「わざ」に長けていたか, 定量的に示される。レトリックの使用状況を分析するために, 「アメトーク!」の会話を表 3 に従ってコーディングした。レトリック得点とは, 該当会話にて参加者がどのレトリックをど

表 4: アメトーク!におけるレトリックの出現頻度

出演者名 分類	宮迫	蛭原	ナベツ	ケンコバ	山崎	徳井	福田	福島	設楽	日村	小杉	吉田
(a)	2											
(b)	1	1		3		1		1				2
(c)	1											
(d)	1											
(e)		1		3								
(f)												1
(g)						1						
(h)	1			1								
(i)	1											1
(j)			1									
(k)	1		2	1				1				5
(l)	1			3		1	1		1		1	1

表 5: アメトーク!における各参加者のレトリック得点

宮迫	蛭原	ナベツ	ケンコバ	山崎	徳井	福田	福島	設楽	日村	小杉	吉田
36.0	3.0	10.0	16.8	0.0	10.2	0.9	0.9	1.8	0.0	15.3	5.1

の頻度で使用したかを算出し, その総得点を示すものである。様々なレトリックを頻繁に使えば使うほど, 得点は高い。前章で定義した  $n$  種類のレトリック項目(本稿では  $n = 12$ )について, 該当参加者  $i$  のレトリック得点( $R_i$ )の算出方法は次のとおりである。

$$R_i = \frac{100}{n} * \sum_{j=1}^n \frac{\text{該当参加者 } i \text{ により使用されたレトリック } j \text{ の発話数}}{\text{会話全体で使用されたレトリック } j \text{ の発話数}}$$

( $0 \leq R_i \leq 100$ )

この計算により, 会話全体で使用された全てのレトリックのうち, 該当参加者が何%を繰り返すことができたのかが示される。表 4 は「アメトーク! 餃子の王将芸人」におけるレトリックの出現頻度を示したもので, 表 5 はそれらをもとに算出した各々のレトリック得点である。レトリック得点が特に高いのは, 雨上がり決死隊の宮迫氏, ケンドーコバヤシ(以下, ケンコバ)氏, ブラックマヨネーズの小杉氏である。なかでも宮迫氏は 12 種類中 8 種類のレトリックを使用し, 多様な表現による発話を繰り返している。またケンコバ氏は, (a), (c), (h)の 3 種のレトリックを各々 3 回ずつ使用しており, 発話内容において強い個性を発揮している。宮迫氏が巧妙な術語で会話を盛り上げるのに長けている, あるいはケンコバ氏がバラエティ番組において強烈な個性を放っているという暗黙的な印象が, レトリック得点により定量的に示された。

5.2 状況に応じた役回りの演じ分け

展開される話題や他者との関係性に即して, 臨機応変に役回りを演じ分けるのに長けているのが, ケンコバ氏である。本節では「アメトーク! 餃子の王将芸人」および「SHIBUYA DEEP A」における同氏の振る舞いを比較する(表 6)。

ケンコバ氏に期待されている役割は番組により異なる。アメトーク! では主に話題提供者および盛り上げ役, SHIBUYA DEEP A では司会進行役である。両番組における同氏の発話頻度についてカイ二乗検定を行ったところ, SHIBUYA DEEP A での発話頻度<sup>6</sup>はアメトーク! に比べて有意に高かった( $\chi^2(1) = 10.59, p < .005$ )。これは同氏が各番組における自らの役割の違いを意識し, 司会を務める SHIBUYA DEEP A ではより積極的に発話したためであると考えられる。

同氏が特に多く振る舞った役回りは, アメトーク! では「(H) 相槌」, 「(I) ボケ」, 「(F) 補足」, また SHIBUYA DEEP A では「(H) 相槌」, 「(E) 意見」, 「(G) 繰り返す」である。アメトーク! では, 自らの個性を活かして積極的にボケることで, 期待どおりに場を盛り上げている。対して SHIBUYA DEEP A では, 司会者として積極的に意見を述べて会話を先導し, また他者の発言を繰り返すことで他の出演者や視聴者の理解を深めようとしている。

表 6: 各番組におけるケンコバ氏の振る舞いの比較

番組名	アメトーク! 餃子の王将芸人		SHIBUYA DEEP A	
出演者数	12名		8名	
期待されている役割	話題提供者, 盛り上げ役		司会進行役	
発話数 (実現値/期待値)	35/23(回)		121/43(回)	
特に多く振る舞った 役回り (上位3個)	カテゴリ	比率(%)	カテゴリ	比率(%)
	(H)相槌	25.7	(H)相槌	37.4
	(I)ボケる	17.1	(E)意見	14.6
	(F)補足	14.3	(G)繰返す	9.8

表 7: 「アメトーク!」の SCRIPT

出演者名 経過時間	宮迫	蛍原	ケンコバ
0:00:00		(1)おなじみのメンバーが多い中, (A)	
0:00:02	(1)そうですね(H)	(2)こちら, 山崎真実ちゃん(A)	
0:00:04	(2)はい(H)	(3)スタジオ初登場です(A)	
0:00:09			(1)好きだ, 好きだ(I)
0:00:11	(3)誰や, 誰や, 今好きだ言うたの(L)		

表 8: 「SHIBUYA DEEP A」の SCRIPT

出演者名 経過時間	田村	ケンコバ	千葉
0:00:00	(1)さあそして, (A)	(1)はい(H)	
0:00:01	(2)コバさんの(A)	(2)千葉くん(A)	
0:00:02	(3)お気に入り(A)		(1)お久しぶりです(B)
0:00:03		(3)今日は千葉くんのために散髪してきたよ(I)	
0:00:07	(4)だいたいその長さでしょ(L)		
0:00:10		(4)ついさっき(K)	(2)ありがとうございます(B)
0:00:12		(5)予約入れてたから(K)	(3)さっき…(G)

ただし SHIBUYA DEEP A において, ケンコバ氏は司会進行役を全うしながらも, 台本通りに番組を進行しているのみではない. 表 7 は, アメトーク! の番組冒頭にてケンコバ(1)<sup>7</sup>が(I)ボケの役回りを繰り出す場面である. また表 8 は, SHIBUYA DEEP A の番組冒頭にて司会進行役の田村(1)~(3)とケンコバ(1), (2)が出演者を紹介したところで, ケンコバ(3), (4), (5)が司会進行役を一旦中断して「(I)ボケ」, 「(K)悪ノリ」を繰り出す場面である. たとえ司会進行役が求められていても, 自らの得意な「(I)ボケ」, 「(K)悪ノリ」を振る舞う機会を伺い, 単に進行に終始しない役回りを演じている. 多様な役回りを演出し, 求められる役割の異なる場においても, 個性を放つことに成功している.

さらに興味深いのは, ケンコバ氏が「(I)ボケ」, 「(K)悪ノリ」という役回りを振る舞ったことによる効果が, 2 番組間においてやや異なると考えられることである. アメトーク! にてケンコバ氏は, (I)の役回りによって自己の会話を活性化する能力を顕示しながら, 多様な種類の笑いを引き起こすことに貢献している. 対して SHIBUYA DEEP A では, 司会進行役にもかかわらず(I)や(K)の役回りを買って出ることによって, バラエティ番組に慣れない出演者の緊張を和らげることに繋がったと考えられる. このように一見すると同じ役回りでも, 他者との関係性に応じて適切に演じ分けることで, 異なる効果を生み出すことができる.

表 9: SHIBUYA DEEP A の役回り遷移パターンマトリクス(%)<sup>8</sup>

遷移後 遷移前	(A)	(B)	(C)	(D)	(E)	(F)	(G)	(H)	(I)	(J)	(K)	(L)	(M)
(A)	1.5	0.6	0.3	0.6	1.2	0.6	1.2	5.2	0.9	0.0	0.6	0.3	0.0
(B)	0.3	0.6	0.0	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0
(C)	0.0	0.0	0.0	0.6	2.0	1.2	0.3	0.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
(D)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.5	2.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
(E)	1.2	0.0	2.0	0.6	2.9	0.9	1.7	3.2	0.6	0.0	0.9	0.3	0.0
(F)	0.3	0.0	0.3	0.0	2.9	0.3	0.6	3.5	0.0	0.0	0.0	0.3	0.0
(G)	0.9	0.3	0.6	0.6	0.9	1.2	0.9	2.0	0.3	0.3	0.3	0.0	0.0
(H)	7.6	0.0	1.5	0.9	3.2	3.5	1.2	12.2	1.2	0.3	0.3	0.6	0.0
(I)	0.3	0.0	0.0	0.0	0.3	0.3	0.0	0.9	0.0	0.0	0.3	0.9	0.6
(J)	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.0
(K)	0.3	0.0	0.0	0.3	0.9	0.0	0.3	0.3	0.0	0.0	0.3	0.6	0.9
(L)	0.3	0.3	0.3	0.0	0.0	0.3	0.3	1.2	0.0	0.3	0.3	0.6	0.0
(M)	0.0	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.0	0.9	0.0	0.0

表 10: アメトーク! の役回り遷移パターンマトリクス(%)

遷移後 遷移前	(A)	(B)	(C)	(D)	(E)	(F)	(G)	(H)	(I)	(J)	(K)	(L)	(M)
(A)	0.7	0.7	0.0	0.0	0.7	0.0	1.5	3.7	0.7	0.0	0.0	0.0	0.4
(B)	1.1	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
(C)	0.0	0.0	0.0	0.4	0.7	0.4	0.4	2.6	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0
(D)	0.0	0.4	1.1	0.0	0.4	1.1	0.0	2.9	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0
(E)	0.4	0.7	0.4	1.1	3.3	1.5	0.4	3.3	1.1	0.0	0.7	0.0	0.0
(F)	0.7	0.0	0.4	0.4	1.8	0.7	2.2	1.1	0.7	0.0	0.4	0.4	0.0
(G)	0.0	1.1	0.4	0.4	1.1	1.5	0.7	0.4	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0
(H)	4.0	0.0	1.5	2.9	5.5	3.3	0.4	1.8	0.0	0.0	1.1	1.1	0.0
(I)	0.4	0.0	0.0	0.0	1.5	0.0	0.0	0.4	0.0	0.0	0.7	2.2	0.0
(J)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
(K)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.5	0.0	0.0	6.2	1.8	0.4
(L)	0.4	0.0	0.0	0.4	0.7	0.0	0.0	0.4	1.1	0.0	2.2	1.5	2.2
(M)	0.4	0.0	0.0	0.4	0.4	0.0	0.0	0.0	0.4	0.0	0.0	1.1	1.5

### 5.3 役回りの遷移パターンマトリクス

ある役回りが振る舞われた直後に振る舞われることが多い役回りを分析し, 役回りの連鎖の傾向を明らかにする. 表 9 は「SHIBUYA DEEP A」, 表 10 は「アメトーク! 餃子の王将芸人」の役回りの遷移パターンマトリクスである. SHIBUYA DEEP A では, (H)→(H)<sup>9</sup>, (H)→(A), (A)→(H), (F)→(H), (H)→(F), アメトーク! では, (K)→(K), (H)→(E), (H)→(A), (A)→(H), (E)→(E), (E)→(H), (H)→(F)の遷移傾向が高かった<sup>10</sup>.

SHIBUYA DEEP A の上位 5 位の組み合わせには, 全て「(H)相槌」が含まれる. (H)→(H)のような相槌の繰返しや, 「(A)進行」や「(F)補足」の合間に丁寧な相槌を挟むことで, 出演者や視聴者の理解を深めようとしていると考えられる.

一方のアメトーク! においても, 「(H)相槌」を含む組み合わせが上位を占めていることには変わりはないが, SHIBUYA DEEP A において最も遷移の傾向が高かった(H)→(H)の組み合わせは多くない. これはアメトーク! と SHIBUYA DEEP A における会話の質について, 顕著な差異を示していると考えられる. 「(H)相槌」を何度も繰返すことにより, 場の理解を促進することが可能である一方で, 話題の展開に時間がかかるため, 全体として会話が冗長に聞こえてしまうおそれがある. 実際に両番組の会話を観察すると, アメトーク! では, 短時間で多くの話題が目まぐるしく展開されるのに対し, SHIBUYA DEEP A の会話はゆったりしており, 時として間延びしているとも感じさせてしまう. この分析結果は, 「(H)相槌」を多重に使うことで, 意図せずして冗長と感じさせる会話が展開しかねないことを示唆している.

アメトーク! では, 「(K)悪ノリ」→「(K)悪ノリ」という遷移が全体の 6.2%を占めている. 直前のボケに多人数が繰返し悪ノリを行い, 単発のボケに留まらない巧妙な笑いが何度も引き起こされている. 悪ノリを次々に繰返すことは容易ではなく, 熟達したお笑いタレントらによる高度な会話に特有の傾向である.

このように遷移パターンマトリクスを算出すれば, 当該会話に特有な役回りの連鎖の傾向を見出すことができ, 当該会話の活性化の性質を示す指標として利用できる.

表 11: アメトーク! の発話者の遷移パターンマトリクス(%)

遷移後 遷移前	宮迫	蛭原	ナベアツ	ケンコバ	山崎	徳井	福田	福島	設楽	日村	小杉	吉田	合計
宮迫	0.0	9.2	2.4	4.0	0.4	0.4	0.0	1.6	0.0	0.0	0.8	2.0	20.8
蛭原	10.4	3.2	0.8	6.0	2.4	0.4	0.4	1.2	1.2	1.2	5.2	0.8	33.2
ナベアツ	1.2	2.0	1.2	0.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.0	5.6
ケンコバ	2.0	6.4	0.4	0.0	0.0	0.4	0.0	0.4	1.6	0.0	2.0	0.0	13.2
山崎	0.4	2.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.8
徳井	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.0	0.0	0.0	0.4	0.0	1.2
福田	0.4	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.4	0.4	0.0	0.0	0.0	1.6
福島	1.6	0.8	0.0	0.8	0.0	0.0	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.6
設楽	0.4	2.0	0.4	0.4	0.0	0.4	0.0	0.0	0.0	0.8	0.0	0.0	4.4
日村	1.2	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.0	0.0	0.0	2.0
小杉	1.2	4.8	0.0	2.0	0.0	0.0	0.4	0.0	0.8	0.0	0.0	0.0	9.2
吉田	0.8	1.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.0	2.4
合計	20.0	32.8	5.2	14.0	2.8	1.6	1.6	3.6	4.4	2.0	9.2	2.8	

#### 5.4 発話者の遷移パターンマトリクス

発話者の遷移パターンマトリクスとは、話者交代における発話者の遷移の頻度を確率に換算したものである。各参加者の発話遷移の合計値を算出すると、該当参加者が他者の発話を誘発したり、他者の発話を受けて話題を継続させたりすることに、いかに長けているかが定量的に示される。また個別の遷移傾向から、発話が遷移しやすい参加者の組み合わせを抽出できる。

表 11 は、「アメトーク! 餃子の王将芸人」における発話者の遷移を示した遷移パターンマトリクスである。特に多かった遷移の傾向を示すため、高確率のセルを上位から順に数え上げ、その確率の累積が 80% に達するまでのセルに色付けした。

まず、各参加者の発話遷移の合計値に注目すると、司会進行役の宮迫氏と蛭原氏、次いでケンコバ氏、小杉氏が発話の中心的役割を担っていることが読み取れる。なかでも蛭原氏は多くの出演者から発話を引き出したり、出演者の発話に応答したりして、会話全体の流れを担っている。

表 11 の太線部分は、司会進行役の宮迫氏と蛭原氏が関与した遷移である。〈司会者以外→司会者〉<sup>11</sup>の遷移を観察すると、両司会者の発話を頻繁に引き出しているのは、ナベアツ氏、ケンコバ氏、小杉氏である。〈ナベアツ→宮迫〉の確率は 1.2%、〈ナベアツ→蛭原〉は 2.0%、〈ケンコバ→宮迫〉は 2.0%、〈ケンコバ→蛭原〉は 6.4%、〈小杉→宮迫〉は 1.2%、〈小杉→蛭原〉は 4.8% である。司会進行役が存在する会話において、司会者という権力者の発話を引き出すことで、3 氏は会話の中心的存在として君臨することに成功している。

一方で〈司会者→司会者以外〉の遷移において、両司会者の発話に積極的に応答しているのは、ケンコバ氏と福島氏である。〈宮迫→ケンコバ〉の確率は 4.0%、〈蛭原→ケンコバ〉は 6.0%、〈宮迫→福島〉は 1.6%、〈蛭原→福島〉は 1.2% である。ケンコバ氏は前述した〈司会者以外→司会者〉の遷移でも高い傾向を示しており、会話にて両司会者との良好な関係性を築くことができている。対して福島氏は、前述した 3 氏ほどは司会者の発話を引き出すことができている。〈司会者以外→司会者以外〉の遷移傾向も極めて低いことから、福島氏は発話の際に司会者の誘導に頼りがちであることが分かる。

司会進行役の 2 人が関与していない発話者の遷移の中で、特に傾向が高い組み合わせのうち、〈ケンコバ→小杉〉(2.0%)、〈小杉→ケンコバ〉(2.0%)、〈ナベアツ→ナベアツ〉(1.2%) について、以下に詳細に論じる。

- 〈ケンコバ→小杉〉と〈小杉→ケンコバ〉

ケンコバ氏と小杉氏は、司会者が関与しない中で、互いの遷移傾向が高い唯一の組み合わせである。両者は、互いの発話に対し、頻繁にツッコみや補足を加えることで応答し合っている。一般にお笑いタレントは、特性としてボケ役とツッコミ役に分かれていると考えられがちであるが、両氏のような熟達者同士の場

合、状況に応じて互いが他にツッコむ様子もよく観察される。両者は互いに他を刺激しあって活発に会話していることが伺える。

- 〈ナベアツ→ナベアツ〉

この遷移傾向は、ナベアツ氏の発話に対し誰も応答してくれないために、同氏が一人で発話を続けざるをえない状況が発生したことによる。この傾向が高いと、発話が空回りしていると捉えられがちであるが、アメトーク! では必ずしもそうは感じさせない。これは、ナベアツ氏のボケを他の出演者が意図的に無視し、同氏を孤立させた状態で話し続けさせ、場の失笑を誘うことに成功しているためである。一般的には興ざめするやり取りでも、熟達者の手にかかれば笑いに転換できるという好事例である。

#### 6. おわりに

本稿では、コミュニケーションスキルの暗黙的側面を解明し、熟達度を定量的に可視化する手法を提案した。コーディングのための役回りカテゴリおよびレトリック項目を考案した。その上で、お笑い番組を資料として、(1)各参加者のレトリック熟達度計測手法、(2)発話および役回りの使用頻度の算出による、熟達者の異なる状況における振る舞い比較手法、(3)遷移パターンマトリクス算出による、会話全体の活性化の質を示す手法、(4)発話者の遷移パターンマトリクス算出による、発話が遷移しやすい参加者の組み合わせの抽出手法とそれらの分析結果を示した。

本稿にて提案した分析手法は、ジェスチャーや視線等の非言語的要素を考慮していない。またコミュニケーションの質が、参加者の人数や席順など、場の物理的な構成要素に依存することも自明である。今後はこれらの要素を勘案し、改良を続ける。

#### 謝辞

分析手法にご助言いただいた慶應義塾大学の白井宏美准教授、分析にご協力いただいた同大学野口奈摘氏に深謝する。

#### 参考文献

- [Bakeman 97] Bakeman, R., and Gottman, J.: *Observing Interaction: An Introduction to Sequential Analysis* (2nd Edition), Cambridge University Press, (1997).
- [串田 06] 串田秀也: 会話分析の方法と論理—談話データの「質的」分析における妥当性と信頼性, 伝康晴・田中ゆかり編: 講座社会言語科学 6「方法」, ひつじ書房, pp. 188-206, (2006).
- [佐藤 92] 佐藤信夫: レトリック感覚, 講談社, (1992).
- [宇佐美 99] 宇佐美まゆみ: 談話の定量的分析—一言語社会心理学的アプローチ—, 日本語学, 18(12), pp. 40-56, 明治書院, (1999).

<sup>1</sup> テレビ朝日系のバラエティ番組「餃子の王将芸人」の出演者は、雨上がり決死隊の宮迫博之(宮迫)・蛭原徹(蛭原), 世界のナベアツ(ナベアツ), ケンドーコバヤシ(ケンコバ), 山崎真実, チュートリアル, ガリットチュウの福島善成(福島), パナマン, ブラックマヨネーズの小杉竜一(小杉)・吉田敬. 本稿では()内の呼称で表記

<sup>2</sup> NHK 総合テレビのバラエティ番組. レギュラー出演者は田村淳(田村), ケンコバ, 茂木淳一, 橋本奈穂アナウンサー. 2011 年 10 月 21 日のゲストは、夏帆, チュートリアルの徳井義実, 千葉雄大(千葉), 神戸蘭子. 本稿では()内の呼称で表記

<sup>3</sup> スクリプトでは、該当箇所が発話しない者のカラム、および一般に会話分析で記述される沈黙の秒数などの非言語情報は省略したが、分析においては考慮した

<sup>4</sup> 他に(j)隠喩, (k)直喩, (l)誇張法も、一般的な修辭技法であるが分析対象とする

<sup>5</sup> 一致度の判定基準は諸説あるが、 $\kappa \geq 0.6$  でかなりの一致(good),  $\kappa \geq 0.8$  で高い一致(excellent)と判定するのが一般的である

<sup>6</sup> 各発話時間の差異は考慮していない

<sup>7</sup> 「ケンコバ(1)」は、該当箇所でのケンコバ氏の 1 度目の発話を示す

<sup>8</sup> 遷移確率が高かった組み合わせのセルに色付けした

<sup>9</sup> (A)→(B)は、役回り(A)から役回り(B)への遷移を示す

<sup>10</sup> 各々上位 5 位を挙げた

<sup>11</sup> 〈A→B〉は、参加者 A から参加者 B への遷移を示す